

# インターシッポの今

## 活性化の背景と期待される効果

フリーターや早期離職の若者が増加していることに加え(資料1参照)、最近はニート(NEET: Not in Employment, Education or Training)<sup>1</sup>という、定職に就かない上に教育も職業訓練も受けないなど、働く意欲がない若者も約63万人(2003年時点)いるとされ、10年前の約1.6倍に増加している<sup>2</sup>。厳しい雇用情勢もさることながら、若年者の職業観や就労意識の希薄化、多様化もニート増加の要因のひとつとなっている。そこで就職活動を目前にして行われる駆け込み的な就職対策セミナーや、進路相談で初めて自らの将来を本格的に考えさせるなどの従来の方法は見直され始めた。学生一人ひとりの成長段階に応じて考えさせ、働く意識を確立させるという観点から、在学中に企業等で一定期間就業体験をさせるインターンシップ教育が注目を集めている。インターンシップには学生が仕事に対する興味・関心を高め、ビジネスマナーや職業意識を身に付けるとともに、企業・社会の実情を理解するという効果が期待される。

## 受け入れ企業の増加

企業にとってインターンシップは、自社の魅力を理解してもらう機会となる。また、学生の指導に当たる若手社員の育成・成長に結び

付いて職場の活性化を促すといったメリットがある。他方で、教え、体験させるに当たっての人的・時間的労力が割かれたり、企業秘密の漏洩というリスクがあったりというデメリットもある。

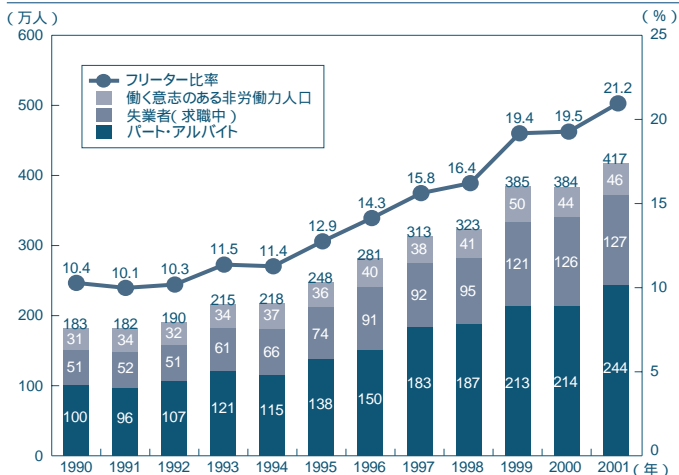
インターンシップ受け入れは、21世紀を支える人材を養成するという社会貢献の一環であるとの認識から、経済団体を中心とした呼びかけでインターンシップの受け入れ企業が全国的に増加している。

## 目的意識を持って取り組む必要性

年々、高等教育機関のインターンシップへの取り組みがさかんになるとともに(資料2参照)、インターンシップを体験する学生も増えている。現在は、学校の呼びかけに応じつつも自発的に取り組む学生が多いようであるが、インターンシップが浸透するにつれて「インターンシップをしないと就職できないから」、「インターンシップをやっておいた方が就職にいい」など、意識の低さも目立つようになった。しっかりと目的意識もなく安易に行うことは、受け入れる企業にとっても学生にとっても不幸なことだ。

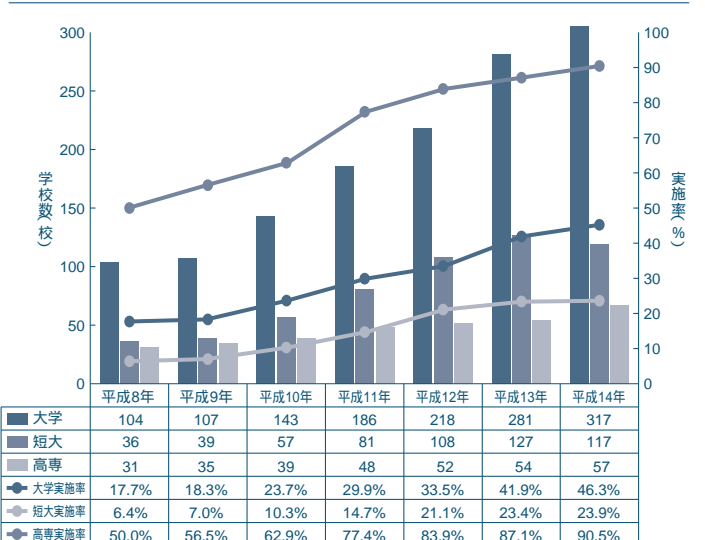
- 1 ニート[NEET: Not in Education, Employment or Training]: 就業も在学もしておらず働こうとしている失業者でもない若者。先進国では若者の失業問題と並び大きな政策課題になっており、日本でもその対策が迫られている。
- 2 労働政策研究・研修機構の小杉孔子副統括研究員が、総務省の労働力調査のデータを分析して明らかにした。

資料1 年々増加するフリーター



(備考) ・総務省「労働力調査特別調査」により作成。  
 ・「フリーター」とは、学生、主婦を除く若年のうち、パート・アルバイト(派遣等を含む)および働く意欲のある無職の人。  
 ・「フリーター・比率」とは、学生、主婦を除く若年人口に占めるフリーターの数  
 ・対象は15歳～34歳の人。  
 出所: 『平成15年版国民生活白書』(http://www5.cao.go.jp/seikatu/whitepaper/h15/honbun/index.html)

資料2 インターンシップ実施校・実施率の推移



出所: 文部科学省高等教育局専門教育課創造教育振興室資料

# 増加するインターンシップ~受け入れ企業にもメリットが



東京経営者協会  
インターンシップ推進支援センター センター長

## 大矢衛史 氏

1975年慶應義塾大学文学部卒。同年日本経営者団体連盟(現/日本経済団体連合会)入職。労政部、教育部、法制部、出版部等を経て、2002年日本経済団体連合会出版・研修事業本部上席参事。2003年東京経営者協会インターンシップ推進支援センターへ出向、2004年より現職。

インターンシップ推進支援センターはどのような経緯で設立されたのでしょうか。

**大矢** 日本経営者団体連盟(以下、日経連/現:日本経済団体連合会)は平成13年12月に、厚生労働省から「インターンシップ受け入れ企業開拓事業」の委託を受けました。日経連は各都道府県に経営者協会を組織する経済団体ですので、インターンシップを全国規模で普及させたいとの意向から、私どもに要請があったわけです。

具体的な実績は。

**大矢** 1年目の平成14年度の場合、学生の受け入れを表明した企業等は約1,900社、そのうち実際に受け入れた企業は約1,200社、そこで体験した学生は約3,200名です。15年度は、受け入れ表明企業約3,900社、受け入れ企業約2,100社、体験学生約6,100名という結果です。

インターンシップが急速に増加している背景として、どのようなことがあるのでしょうか。

**大矢** パートやアルバイトとして働くフリーター、就職しても入社2、3年で辞めてしまう短期離職者、大学を卒業しても就職も進学もしない新卒無業者、さらにはニートと呼ばれる若者が増えております。

依然厳しい雇用環境の下で、希望する職業、職種に就けないという事情もありますが、若者の職業観が育っていない、就労意識が乏しいことも大きな原因と考えられます。一方、少子高齢化の影響により、わが国

の若年者は減少の一途をたどっており、近い将来、若年労働力人口が著しく不足する事態が予測されます。若年労働力の減少、職業意識や就労意欲に欠ける若者の増加によって、わが国の社会的、経済的活力は低下することになります。

このような状況を避けるための一つの手段として、インターンシップが注目されてきました。

学生にとっては、実社会を知るという意味でも、職場での仕事を体験出来るという意味でも、メリットが大きい制度だと思えますが、受け入れる企業側のメリット、デメリットはどのようなことでしょうか。

**大矢** インターンシップの受け入れを機に、就業体験した学生を通じて、大学や他の学生・仲間にも受け入れ企業の情報が伝わることで、当該企業への理解が進み、社会に開かれた企業として、好ましいイメージが定着します。インターンシップを通して大学との関係が深まりますと、優秀な人材を確保できる道が開けますし、さらに、人材育成面だけでなく、研究や開発分野での産学連携へと発展することもあります。また、受け入れた企業からは、学生の世話、指導を担当する社員自身の成長に役立つとか、学生という社外の人に職場を見られるという意識から、職場の活性化をもたらすといった声も聞かれます。

学生を一定期間預かることは、受け入れ側にはかなりの負担になります。どの部署で

受け入れ、何を教え、どのようなことを体験してもらうのか。学生をアルバイトとして雇うのとは違います。日常業務をやりながら、人的、時間的労力を割くわけですから、受け入れ部署には大きな負荷がかかり、なかなか受け入れてもらいにくいことも事実です。

一部の企業では、ホームページなどを通じて、独自にインターンシップの受け入れを行っているところもありますが、こうした動きとは競合しないのでしょうか。

**大矢** インターンシップを全国的に広め、多くの学生に体験してもらうことが目的ですから、競合という意識はありません。また、私どもはどちらかといいますと、中堅、中小企業やベンチャー企業を中心に受け入れ協力をお願いしております。自社のホームページを使って個別学生にインターンシップへの参加を呼びかけている大企業とは若干趣が異なります。

受け入れを依頼する際に、企業に留意してもらいたいこととは。

**大矢** インターンシップが普及するにつれ、インターンシップに対する理解、認識も多様化しています。私どもが進めるインターンシップはあくまでも教育の一環であり、就職・採用とは区別しております。したがって、インターンシップが採用目的に利用されてしまうことを懸念します。インターンシップを進めるに当たっては、次代を担う人材を産学が連携、協力して育成していくという基本的視点が重要です。これを前提とするならば、企業の

## 新世紀 キャリア形成

社会的責任から教育を重視するのか、企業PRと人材確保を主眼にするのか、学生の専門能力・独創性を活用したいのか。いずれに力点を置いたインターンシップであっても認められてよいと思います。

一方、参加する学生が留意することはありますか。

**大矢** 何のためにインターンシップを体験したいのか。目的意識をしっかりと持っていたきたい。「働くとはどういうことか、会社という組織はどのように動いているのかを知りたい」、「就職を希望する業種・職種を体験したい」、「大学での研究テーマを実地に生かしてみたい」など、明確な目的を持って実習に臨めば、インターンシップのもたらす効果は一段と高まるでしょう。

参加した学生の実際の声にはどのようなものがありますか。

**大矢** 体験した学生のほとんどが、その意義を認めています。「組織で働き、人と接することによって社会を見る目が養われ、視野

が広がった」、「いかに知識がないか、勉強不足であるかが分かり、学習意欲がわいてきた」、「生の企業、職場を体験し、企業を判断する基準が変わった」など、いろいろな効果が出ています。

## 関係者すべてが満足できる インターンシップをめざして

事業開始から今年で3年目に入りましたが、新しい事業などは考えていらっしゃいますか。

**大矢** 平成15年の4月より、ネット上で企業と学生が互いに情報を交換することによって、マッチングを支援する「ハイパーキャンパスシステム」を取り入れました。理想の姿は、

全国どこの企業へも学生がインターンシップを申し込むことができるというものですが、地域によって事情があり、まだそこまでには至っていません。しかし、ネットによる情報の広域化により、企業、大学・学生からのお問い合わせも随分増えてきています。

今後の事業の展望をお聞かせください。

**大矢** インターンシップが広く社会に認知され、産学共同による職業教育プログラムという位置付けで実施していくことになりますと、学生と大学、企業が主体性を持って活動を進めていくことが重要です。その際、一大学、一企業の取り組みでは限界があります。私ども経済団体は、インターンシップの量的拡大だけでなく、質的向上を図っていくために、また、学生、大学、企業という関係者がいずれも満足できるように、今後とも関係省庁や大学団体等教育機関に対して積極的な働きかけを行いたいと考えております。

# 社会に経済界を知ってもらうのが使命 学生、教師ともにニーズは高まる



財団法人経済広報センター国内広報部次長

## 佐桑 徹氏

1958年生まれ。1981年慶應義塾大学経済学部卒業。1981年～1990年経済団体連合会(経団連)事務局で経済協力、広報等を担当(1988年～1989年韓国全国経済人連合会に外向)。1990年～1998年東京新聞(中日新聞)経済部記者。通商産業省、農林水産省、経済企画庁、証券、流通等を取材。1998年経済広報センターに、主任研究員を経て、2004年国内広報部次長(現職)、著書に「図解でわかる部門の仕事」[広報部]、「日本能率協会マネジメントセンター」(2001)等。

昨年、日本経済団体連合会(以下、日本経団連)が発表した「若年層を中心とする雇用促進・人材育成に関する共同提言」(右頁・資料導入参照)を見ると、産業界の人材育成支援や教員のための産業理解活動の実施機関のひとつとして、経済広

報センターが挙げられています。そこでまず、経済広報センターのそもそもの設立の経緯および活動内容についてお聞かせください。

**佐桑** 当センターは経団連の広報委員会が中心になって1978年に設立された組織

で、いわば経済界の総意に基づいてつくられた広報機関であると言えます。

ご存知のように、日本経団連は政治家や官僚にロビー活動<sup>1)</sup>をすることで、規制改革や税制改革などを実現する総合経済団体ですが、現代のような民主国家においては、

こうした行為は国民の支持を得ないとうまく進められません。そこで社会にもっと経済界の考えを知ってもらおうとしてきたのが当センターということになります。時は折しもオイルショックの時期で、一部には「大企業は悪いものだ」というような社会風潮がありました。そのような誤解を解くために、企業や経済界が、一般の人々の生活に企業がどのように役に立っているのかを広く知らせるための意味合いもありました。

最近では「ステーキホルダー」<sup>2</sup>という言い方をしますが、マスコミや株主、教育関係者、地域住民、企業の社員といった方々に、経済界の考えや活動の実態などを幅広く伝えることも、当センターの役割となっています。その一つの側面として、先ほどの日本経団連による提言にあるような人材育成や雇用促進支援の活動があるわけです。

つまり、昨今の若年層の就職難、仕事離れといった問題意識でスタートした活動ではないのですね。

**佐桑** その通りです。例えば、民間企業研修の活動は既に21年も前から続いております。

民間企業研修とはどのようなものですか。

**佐桑** 教育機関を小・中・高・大に分けて、小・中・高の先生には、夏休みの時間を利用して、約3日間で実際に企業の工場や本社を回って就業体験をしていただきます。これまで21年間で延べ5,567人の先生に145社の企業を体験していただいています。特に、最近では「総合的な学習の時間」ができたため、この研修に対する先生方の関心も高まっているようです。そして自分の体験を通して子どもたちに伝えていただければ、先生方の思いも込められて、子どもたちに伝わるものがあるのではないかと思います。

また、当センターでは3年前「産業データプラザ」というホームページを立ち上げました<sup>3</sup>。これは、子ども向けに日本の産業のさまざまなデータが分かるようなつくりになっており、グラフやビジュアルを駆使して、日本の産業の現状が理解できるようになっています。

さらに、今年から先生方を対象とした環境教育のシンポジウムも始めました。環境教育に関する企業の取り組みを、学校の授業

提言の背景	
1 増加する若年失業率	・2002年の20～24歳失業率9.8% ・20年前の約2.5倍
2 増加する新卒無業者比率	・大卒者の 21%が就職できない(10年前の3倍)
3 増加するフリーター	・フリーター(15歳～34)は2000
4 高い若年者就職率	・入社3年目までの就職率は3割



未就業の若年者は既存の保険制度の対象外であり、地域主体の新たな枠組みが必要。  
このままでは、人材不足や失業者の増加をもち、経済成長の低下、社会制度の破綻を招くなど、わが国にとって極めて重大な問題。

出所：社団法人日本経済団体連合会ホームページ  
(<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2003/041/concept.pdf>)

の中で扱っていただけるように、会場では先生方にテキストを持ち帰っていただき、自分のクラスでの授業に役立てていただいています。

大学についてはどのような活動をされているのでしょうか。

**佐桑** 大学に対しては民間企業による寄付講座を行っています。いわゆる企業名を前面に出した冠講座とは違い、「企業人派遣講座」という名前の通り、当センターで民間人講師のピックアップから、テーマの設定、そのテーマの内容にふさわしい講師のアレンジまで、一括して行っています。まだまだ急激な広がりを見せるというようなものではありませんが、インターネットなども使って、少しずつ全国にも展開していきたいと考えています。ただ、企業人のアレンジがなかなか難しいという点が今後の課題です。

この講座はおおよそどのくらいの規模で実施しているのでしょうか。

**佐桑** だいたい年間80人前後の民間人を大学に派遣し、3,000人ほどの学生が受講している計算になると思います。学生には理論の勉強だけではなく、こうしたケーススタディで実社会が分かる機会は非常にニーズがあるようですし、大学側からも、このような産学連携による授業方法へのニーズは高まってきております。

### 複雑化する社会と学校教育の間のギャップを埋める活動を目指す

ほぼ20年間活動している中で、最近特に目立った傾向というのがありますか。

**佐桑** 一つはものづくり離れ、理科離れの

傾向が顕著なことです。先生の中にも実験が苦手という方が少なくありません。そこで、実験の研修を行うことができそうな研究所等に先生方を派遣させていただけないか考えています。もう一つは学校側の要請で、「教頭赴任前研修」として民間企業研修を利用するところが増えてきています。学校もこれからは経営の時代ですので、教頭先生になる前に企業のマネジメントを勉強しようということのようです。

今後、何か新しく始めようとしている具体的なプランはありますか。

**佐桑** われわれの活動の根幹は、あくまで企業の実態を知ってもらうことです。その根幹を維持しながら、何か新しいものができるかということで、まだ企画段階ではありますが「お父さんの背中プロジェクト」という、生身の人間の顔が分かる、そして企業の様子も分かるものを検討しています。また、社会が急激に複雑化していく中で、例えば銀行一つを取っても、従来とは仕事内容が大きく変化しています。そうした変化は学校の先生にもなかなか分からないものなので、そのギャップを埋めるようなことができないかと考えています。

1 ロビー活動：政治的決定に影響を及ぼそうとして、議員・官僚・政党などに働きかける院外活動のこと。特にアメリカのものを言い、世論の形成・動員までも含める。  
2 ステーキホルダー：企業に対して利害関係を持つ人。社員や消費者や株主だけでなく、地域社会までも含めて言う場合が多い。  
3 産業データプラザのホームページ  
<http://sangyo.kkc.or.jp/>



## 金田北斗 さん

明治大学政治経済学部  
経済学科3年

[インターンシップ先]  
株式会社東京リーガルマインド  
雇用支援事業本部

いつごろ、どのようなきっかけでインターンシップをやるうと考えたのでしょうか。

**金田** 昨年の後期に、来年から学部でインターンシップの募集を始めることを教授から教えていただき、就職のためにもやってみないかと思って申し込みました。

**菅野** 私の場合は、大学のキャリアセンターによる就職説明会がきっかけでした。3年の秋から始まる就職活動の前にインターンシップをやっておけば、仕事についてより現実的に考えられるだろうと思っていたところ、説明会でインターンシップがあることを聞きました。実際インターンシップをした先輩方の話も聞くことができ、役立ちそうだなと思ったので応募しました。

インターンシップ先として、この会社を選んだのは。

**菅野** 私は、大学のキャリアセンターから紹介してもらいました。たくさんのインターンシップ先の中から行きたいところを第5希望まで出すことができたのですが、私はマスコミなど、人気があるところばかりを書いてしまったことから、インターンシップ先がすぐには決まりませんでした。そのようなとき、キャリアセンターの方から「希望の業界でなくても、インターンシップを体験することはいいことだし、業界を絞らないでやった方がおもしろいよ」と言われましたので、私も「会社なら本当どこでもいいので紹介してください」とお願いしました。その後すぐにLECを



## 菅野江里香 さん

立教大学社会学部  
現代文化学科3年

[インターンシップ先]  
株式会社東京リーガルマインド  
雇用支援事業本部

ご紹介いただきましたので、「やってみます」とお返事して決めました。

**金田** 僕は、雇用に関する事業をされているということで、「働く」ことについて、より深く考えることができると思い、選びました。

今回、どのような仕事をしたのでしょうか。

**金田** 営業に同行したり、登記簿や道路許可証といった証明書を役所に取りに行ったりとといった仕事をしました。デスクワークではセミナーのチラシをつくれたり、電話がけをしたりしました。

**菅野** そのほかにも、さいたま市や横浜市のハローワークへ見学に行き、雇用サービスの現場を見せていただきました。最終日には企画もやらせていただき、そのプレゼンテーションもしました。

7日間、インターンシップをやってみてどうですか。

**金田** 就職活動の前に、仕事がどのようなものなのかを多少なりとも理解できた点はよかったと思います。また、インターンシップ前までは、みんな仕方なく働いていて、暗い感じで働いているのだろうと想像していたのですが、実際には社員の方はみな楽しそうで、やりたい仕事をやっていると嫌なことばかりでもないのだと感じました。その一方で、やはり会社という組織の中においては、自分の都合だけで仕事を進めることはできず、責任をもって当たらなくてはならないな

ど、今までの大学生活にはない体験だったことから、気を遣いました。

**菅野** 私も「働くこと」や「会社」というものが多少なりともつかめたこと、そして自分自身の性格や適性を考えるきっかけになったことがよかったです。これまでマスコミ業界を希望していましたが、今ではあこがれが強くなったように思います。また、楽しさを自分で見付けることもできるのだということも分かり、自分に合った就職先を見つけていこうと前向きな姿勢になりました。ただ、インターンシップ前までは、あまり授業もなく、ダラダラしていた時期で、毎日スーツを着て電車に乗って出社するのは思いのほか大変でした。そのほか、営業が体力的に結構辛い仕事だと思いました。

インターンシップの必要性について。

**金田** これから就職活動に備えてインターンシップをやるうと、実際に積極的に取り組む人には非常によいと思います。しかし、何の目的もなく、言われたからやるというのでは働く気がなくなるのではないかと思います。

**菅野** 自らやるのが重要で、強制的にやらされるのではあまり効果はないと思います。インターンシップでは、仕事の楽しさとともに辛さも知ることができ、そこから学ぶこともあります。そのような経験があれば、企業に入って「合わなかった」とすぐに辞めてしまうようなこともないと思います。何より先働かせていただく機会は貴重ですし、大事だと思います。



## 水口紅美子 さん

早稲田大学教育学部  
国語国文学科2年

[インターンシップ先]  
文部科学省  
初等中等教育児童生徒課

いつごろ、どのようなきっかけでインターンシップをやるうと考え始めたのですか。

**水口** 2年生になる直前の3月ごろに、大学のキャリアセンターで開かれたキャリアガイ

ダンスへの参加をきっかけに、インターンシップについて考え始めるようになりました。

そして3月末、やはりキャリアセンターのインターンシップガイダンスに参加したとき、環境省でインターンシップをやったOBの先輩の「絶対に2年生でインターンシップをやった方がいい」というお話がさらに後押ししました。インターンシップは3年生くらいでやるものだと思っていたのですが、私もいろいろ話を聞くうちに「2年生でインターンシップを

やるう！」と思うようになったのです。

インターンシップの情報は、学校や先輩のなどから収集したのですか。

**水口** 最初はそうでした。インターンシップをやるうと決めてからは、自分でもいろいろと調べました。

インターンシップ先として、文部科学省を選んだのは。

**水口** 大学で教育を学ぶうちに、教育現場を統轄する教育行政に大きな関心を持つ

よくなりました。その教育行政を学ぶ上でも、文部科学省でのインターンシップはとてもよいと思ったので、インターンシップの授業も行政コースを選択し、インターンシップ先も、文部科学省に決めました。

今回、どのような仕事をしたのですか。

**水口** 主に、会議の運営や、ちょっとしたデスクワークのお手伝いをさせていただきました。会議の運営では、いろいろな方の意見を聞くことができ、それをメモして自分で考えたりすることが、非常に勉強になりました。

5日間、インターンシップをしての感想は。

**水口** 初日はすごく緊張してしまい、なかなか思う通りに動けませんでした。自分で

いろいろと考える場面が多く、マニュアルに沿った作業が多いアルバイトとは全然重みが違うな、と感じました。また、私は人見知りをしてしまうため、最初はコミュニケーションについても不安がありました。それでも自分なりにモチベーションを高め、仕事に精一杯取り組んでいたところ、職員の方から「しっかりしているし、大丈夫だよ」とおっしゃっていただき、とてもうれしかったです。

疲れましたが、5日間は短かったです。今は、今後、政策がどのように進行していくのか、もう少し見ていたかったなと思っています。

今回のインターンシップの経験は、今後どのような面で役立っていくと思いますか。

**水口** 短い期間ではありましたが、自分の

よい面、悪い面が顕著に表れ、自己理解に役立ったと思います。また、教育行政のおもしろさを実感することができ、学業の面でも役立てられたこともよかったと思います。

インターンシップは、進路決定、就職活動に役立つというだけでなく、視野が広がったり、相手を理解しようとしたりと、いろいろよいところがあります。

また3年生になったら、インターンシップをしようと考えていますか。

**水口** そうですね。実は、今度は8月に区役所でインターンシップをさせていただくことになっています。また教育行政なのですが、その次は、民間企業でもインターンシップを試みようと思っています。



## 小川真希さん

立教大学文学部  
英米文学科3年  
【インターンシップ先】  
株式会社プロキャリア

インターンシップを申し込んだきっかけは何でしょうか。

**小川** 昨年インターンシップに参加した先輩から「自分で目的意識を持ってインターンシップに参加するということや仕事を通じて得られたことは、絶対に今後の自分にとっての自信につながる」という話を聞き、ずっとインターンシップに興味を持っていました。これから就職を控えて、何をしたいのか、自分がどんな職業に向いているのかということが漠然としすぎていたので、まず企業で働くということを体験してから自分の向いている道を考えてみたいと思い、やってみることにしました。

今回のインターンシップ先はご自分で希望されたのですか。

**小川** 最初はLECに申し込み、支店での受付などを体験したいと思っていたのですが、人材派遣会社のプロキャリアに決めました。どのようなことをするのか分からず不安もありましたが、人材派遣業界について一から教えていただき、その仕事を体験する中で、お客様の人生に直接かかわるのでとても責任の重い仕事ですが、だか

らこそやりがいのある魅力的な仕事であると感じました。

どのような業務に当たりましたか。

**小川** まずは、コーディネーターという、プロキャリアに登録されている就職希望者の方と仕事をマッチングをする仕事です。もうひとつは営業です。3日間営業の方に同行させていただき、いろいろな企業や事務所を回り、基本を学びました。今までのイメージでは、営業は新規開拓が中心だと思っていたのですが、実際には関係のあるお客様を訪問して近況を聞くことで、そのお客様との信頼関係をさらに深めていくことも重要なことであることを知りました。

インターンシップの感想は。

**小川** よかった点は、「働く」ということに対して具体的なイメージがつかめたことです。今までアルバイトなどで働いた経験があっても、なぜ企業が利益を求めなければいけないのか、なぜ責任感を持って仕事をしなければいけないのかということが分かりませんでした。しかし実際に企業で働いて、営業とコーディネーターの仕事を両方経験することにより、仕事のひとつひとつは関連があり、その全てをしっかりとやらなければ企業がまわっていかないということを知りました。また苦勞した点は、人材派遣業界についての知識がほとんどなかったので、はじめは業務について理解するのも大変で、自分の知識不足を認識させられたことです。楽し

いことだけでなく、困難も乗り越えてきたので、その点は自信につながりました。

学生と社会人の違いとは。

**小川** 以前、特許事務所の先生とお話する機会があったのですが、「学生は100点満点のうち70点を取っていればよいが、社会人になったら120点取ることが求められる」という話を聞きました。自分の仕事に責任を持ち、それ以上の結果を出すことが社会人には求められるのだと思います。

予想と違った点は。

**小川** 今までは、働くことは厳しいことで、あまり社会に出たくないと思っていました。しかし、社員さんの話を聞いていると、とてもやりがいを感じて仕事をされているなと思いました。どの仕事にもきついことは必ずあると思うのですが、やりがいを感じられればその中にも楽しみを見付けられますし、その楽しみを広げていこうという意識も持てるので、きついだけではないということが分かりました。

インターンシップについてどう思いますか。

**小川** 学生のうちにインターンシップを経験することによって、働くことに対するイメージが持ちやすくなるので、自分の将来について考える大きな手がかりになると思います。大学生には普及してきていますが、ぜひ高校生にもインターンシップを体験してほしいと思います。